高知県立
文学館
高知県立文学館ニュース

藤並の森

Vol. 66

幼い頃の中脇さんの住まいにほど近い中村の赤鉄橋

リレー随筆

べっぴんさんだったころ

中脇初枝

高知に住んでいたころ、わたしはべっぴんさんでした。

徳島人の母と高知人の父のもと、徳島で生まれたわたしは、2歳から18歳まで、中村(現四万十市)で育ちました。

母語は幡多弁です。

何度かひっこしましたが、四万十川のあちらからこちらへ移っただけで、いつも四万十川べりで暮らしていました。

あのころ、どの家の親たちも、いつも忙しそうに働いていて、わたしたちこどもは、こどもだけで遊んでいました。

川で泳ぎ、菜の花畑でままごとをし、ダンボールをお尻に敷いて堤防を滑り、木に登ってぐいみややまももを取り、工事現場へ水晶を拾いに行きました。小学三年生まで自転車に乗れなかったわたしは、補助輪をつけた自転車で、どこへでも行きました。がらがらがらがら、さぞかしうるさかったろうと思いますが、おとなたちは何も言いませんでした。

こわいこともたまにはあって、道路で「だるまさんころんだ」をしていて車にはねられたり、鷺草がめずらしくて、みつめているうちに熱射病になって倒れたり、人さらいにあったりしました。でも、いつも、近所の人たちが助けてくれました。鷺草の生えていた庭のおうちの人は、わたしを家に運んで布団で寝かせてくれましたし、近所のおんちゃんたちは人さらいを走って追いかけて捕まえてくれました。

そして、近所の人たちはいつも、わたしの顔を見るたびに、「べっぴんさん」と呼んでくれました。学校から帰るたびに、近所のおばちゃんたちは、「べっぴんさん、おかえり」と声をかけてくれました。わたしはそのころ、本当は自分がべっぴんさんじゃないことを知っていました。中村では、女の子はみんな、そう呼ばれることを知っていました。だから、そう呼ばれることはあたりまえのことだと思っていました。

今、わたしは、中村から汽車と飛行機を乗り継いでも、6時間はかかる都会で暮らしています。もう、わたしのことを「べっぴんさん」と呼んでくれる人はだれもいません。

あの場所から遠く隔たってはじめて、そのかけがえのなさに気がつくとは、わたしはなんてうかつなのでしょう。

このたび、そんなわたしを見守って、育んでくれた高知の地で、文学展を開いていただけることになりました。高知のみなさんに感謝の気持をこめて、これまでの作品をみんな並べて、お迎えしたいと思います。みなさんにお目にかかれることを楽しみにしています。

(作家)

展覧会紹介 Exhibition

中脇初枝展 ～ちゃあちゃんの里帰り～

平成26年
9月19日(金)
▼
11月3日(月・祝)
企画展示室
観覧料500円

高知県中村市(現・四万十市)で少女時代を過ごした作家の中脇初枝さん(1974年1月1日～)は、県立中村高等学校在学中、四万十川のほとりを舞台とした作品『魚のように』(1991)で第2回坊ちゃん文学賞を受賞し、17歳で作家デビューしました。やわらかく温かい筆致で描かれた作品世界は多くの人々に愛され、『きみはいい子』は2013年に第28回坪田譲治文学賞を受賞し、映画化も決定。また一方で、大学で専攻した民俗学を生かし、高知県をはじめとする昔話の再話にも積極的に取り組んでいます。

本展覧会では、小説、昔話の再話、児童文学と、さまざまなジャンルで展開されている中脇さんの作品世界の魅力をご紹介します。

(撮影／根津千尋)

※中脇さんの愛称「ちゃあちゃん」について…
中脇さんの子どもたちが、「おかあさん」と言えなかったころの発音そのままに、中脇さんを「ちゃあちゃん」と呼んでいることから付いた愛称です。

展示構成

Ⅰ ちゃあちゃんのふるさと

中脇さんが育った四万十市中村は、高知県の西南部となる幡多地域の中心に位置し、三方を山に囲まれ、南東は太平洋に面しています。四万十川に代表される自然と、温暖な気候に恵まれた地です。

今から約五百余年前、前関白一條教房公が応仁の乱をさけてこの地に下向し、京都を模したまちづくりを行いました。南海地震など度重なる天災のため、昔の街並みは残っていませんが、京都風のまちづくりの基本である碁盤の目状の街並みや、独特な行事から、土佐の小京都とも呼ばれています。

小学生の頃、中脇さんは、河原に秘密基地を何個も作り、川を泳いで遊んでいたそうです。大きくなってからは、友だちと河原に座っておしゃべりを楽しんでいたとか。そんな中脇さんを、地域の人たちは温かく見守って下さったそうです。

中脇さんの豊かな感性を育んだ中村の自然や民俗、人々の様子を、写真パネルや民具などを通してご紹介します。

Ⅱ ちゃあちゃんってどんな人？

中脇さんの作品を読むと、優しい語り口の文章から、とても誠実で、真摯なお人柄がうかがえます。それでは、中脇さんは中村でどのような少女時代を過ごし、そのあとどのように作家としてご活躍されたのでしょうか？

このコーナーでは、作家としての中脇さんのこれまでの歩みを示すとともに、中脇さんの愛読書や学生時代に書いた感想文、昔の写真など、思い出の品を通してそのお人柄を感じて頂きます。

Ⅲ ちゃあちゃんの物語世界

①こどもの絵本

お子さんを授かってから、子どもに寄り添った本を書くようになったという中脇さん。絵本では、短い文章で誤解なく伝えられるように工夫しているそうです。

『こりゃまてまて』(2008 福音館書店)、『くもの大相撲』(2005 福音館書店)、『あかいくま』(2011 講談社)など、子どもへの愛がぎゅっと詰まった中脇さんの児童文学作品を、酒井駒子さんや鎌田歩さん、布川愛子さんの素敵な絵本原画とともにご紹介します。

②語り継ぐむかしばなし

大学時代、民俗学を専攻されていた中脇さんは、昔話の再話など、積極的に昔話を紹介しています。そこには、人から人へと語り継ぐという長い間続けられてきた営みを大切にしたいという、中脇さんの思いがあります。

中脇初枝・文　酒井駒子・絵『こりゃまてまて』
(2008年福音館書店)

会紹介 展覧 Exhibition

中脇初枝展 ～ちゃあちゃんの里帰り～

平成26年
9月19日(金)
▼
11月3日(月・祝)
企画展示室
観覧料500円

「とっぽうくらべ」(2004 福音館書店)、「ちんころりん」(2011 福音館書店)、「ちゃあちゃんの昔話」(web福音館 http://www.webfukuinkan.com/で現在連載中)など、昔話を題材にした作品と、田島征三さんや奈路道程さん(ともに高知県育ち)、ささめやゆきさんによる素敵な挿絵をご紹介します。

中脇さんご自身による昔話の語りがCDで聞けるコーナーもあります♪

中脇初枝・再話　奈路道程・絵「ちゃあちゃんの昔話」(web福音館)より「ハンガイ森の兄妹」

③小説の世界

中脇さんの小説には、辛い現実に直面し、傷つきながらも、最後には前を向いて進んでいこうとする人々が描かれます。

思春期の危うさと繊細さを描いたデビュー作「魚のように」(1991)、少女の成長を描いた『祈祷師の娘』(2004 福音館書店)、家族の再生をテーマとした『こんこんさま』(2013 河出書房新社)の他、児童虐待をテーマとした作品『きみはいい子』(2012 ポプラ社)、その続編にあたる『わたしをみつけて』(2013 ポプラ社)など、やわらかで温かな筆致ながら、辛いことからも目をそむけない誠実な姿勢で描かれる中脇作品の魅力を、パネルや、インタビューが掲載されている雑誌などによってご紹介します。

中脇さんの素敵な作品世界を、ぎゅっと詰め込んでご紹介する展覧会です。中脇さんのふるさと・中村をはじめとする幡多地域の魅力も満載です！

小さなお子さんからご高齢の方まで、どなたでもお楽しみ頂けるようにしておりますので、ぜひ皆さま、文学館までお出かけください。

※今回、展覧会では、昔話の語りを耳で聞けるコーナーや、触れて読める点字本、作品『あかいくま』にちなんであかいくまのぬいぐるみを抱っこして写真が取れるコーナーなどをご用意しています。視覚に障がいのある方もそうでない方も、五感で中脇さんの素敵な物語世界をお楽しみいただけます。

(学芸課／永橋禎子)

◆関連企画のご案内◆

■中脇さん記念対談

作家の中脇さんと当館館長による対談です。
幡多地域出身同士、面白いお話が聞けるかも？！

- 日　時：10月26日(日) 午後2時～3時30分
- 場　所：高知県立文学館 1階ホール
- 参加費：要当日観覧券
- 申　込：電話または文学館受付にて事前申し込み。(定員100名)

■文学散歩　ちゃあちゃんのふるさとを行く

ちゃあちゃんが育った小京都・中村を中心に、幡多の昔話スポットや史跡などを巡ろう！

- 日　時：①お気軽コース(日帰り)… 9月25日(木)
  ②じっくりコース (1泊)…10月12日(日)～13日(月・祝)
- 定　員：各30名 (電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。)
- 参加費：未定 (※詳細は文学館までお問い合わせください。)

■木洩れ日コンサート　親子で親しむ童謡と朗読

アコーディオン(奏者:坂野志麻さん)のコンサートと中脇さんの作品の朗読をお楽しみ頂ける企画です。
文学館前にひろがる藤並の森で、心温まるひとときをどうぞ。

- 日　時：10月19日(日) 午後2時～
- 場　所：文学館前藤並の森　※悪天候の場合は高知県立文学館1階ホール
- 参加費：無料　(申込み不要。当日、直接会場までお越しください

■朗読の会「中脇初枝作品を読む(仮)」

文学館朗読サポーターの皆さんによる、作品の朗読です。

- 日　時：10月18日(土) 午後2時～
- 場　所：高知県立文学館1階ホール
- 参加費：無料
- 申　込：不要 (当日、直接会場までお越しください)

他にもおはなしキャラバン(10月4日(土)、11月1日(土)開催)など、多彩な関連企画を用意してお待ちしています。

■展示解説

展覧会担当者による展示解説です。

会期中
毎週土曜日
午後1時半～
(約20分程度)

参加費：要当日観覧券
申　込：不要。
直接会場にお越しください。

山本一力の世界展 終了報告＆舞台「だいこん」名古屋で開催！

企画展「山本一力の世界展～明日は味方だ～」終了しました。会期中には、熟年層を中心に熱心な一力文学のファンが足を運んでくださいました。

展覧会に関しては、山本一力ご夫妻の全面的なご協力のもと、開催することができました。資料の提供を始め、会期中3度にわたり高知に足を運び、オープニングセレモニー、記念講演会、高橋惠子さんとの対談への出席、飛び入りの展示解説等、多大なご支援をいただきました。心よりお礼申し上げます。

オープニングセレモニーには、尾﨑正直高知県知事も出席。一力さんと一緒に展示をご覧になり、これまでの業績と今後に大きな期待を寄せられていました。

また、講演会では、一力さんがこれまでに出会った人々に対する感謝や時代小説を書くきっかけなど、一力さんの人間性にも触れる内容が語られ、会場からは共感と感動の大きな拍手が贈られていました。

他にも、文藝春秋社、講談社、中央公論社、祥伝社を始め、「あかね空」を映画化した表現社の石黒さん、サンライトの伊藤さんといった関係者の方々にご協力をいただき、盛況の中、幕を閉じることが出来ました。皆様に心よりお礼申し上げます。

アンケートでは90％以上の方々から大変良かったという評価をいただきました。会期中は、熟年層を中心に、熱心な一力文学ファンが足を運んでくださっていました。

江戸時代の深川・浅草や土佐を舞台とした作品を書き、時代小説のトップクラスの作家として活躍中の一力さんですが、実は「あかね空」を始めとして、舞台化された作品も多くあります。

今年、8月4日から17日まで、一膳飯屋を営む女性の半生を描いた「だいこん」が、名古屋の中日劇場で舞台上演されます。主人公のつばきを石川梨華さんが演じ、高橋惠子さん、梅沢富美男さん、赤井英和さんといった豪華な顔ぶれが脇を固めています。

江戸下町を舞台に家族の絆や働くということの大切さが描かれており、白いご飯が食べたくなるような、心温まる舞台に仕上がっていますので、ご興味のある方は、是非、ご覧ください。

時代小説の他にも現代ミステリー、現代小説などのジャンルにも取り組まれている山本一力さん、ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

（学芸課長／津田加須子）

館長室から

「文化」と「文明」について

元吉　喜志男

先日、あることで「文化とは？」「文明とは？」について、改めて考える機会がありました。その際、甦ってきたのが、以前、西洋史学者で愛知万博の総合プロデューサーなどにも携わられた東京大学名誉教授の故・木村尚三郎先生からお聴きした話です。

横文字で言うと、「文明」は「civilization＝シビリゼーション」の訳語であり、「シビル」すなわち「都市民的な」と言う冠をかぶっている。つまり「文明」とは、都市や都会と関係する。都市には地方から様々な人が集まっており、国境を越えてどこへ持っていっても通用する普遍的な生き方の形式が発達したのが「文明」である。だから「文明」という言葉は、技術文明や物質文明といった表現によく馴染むというのです。

一方、「文化」の方は「culture＝カルチャー」つまり「耕作」と言う言葉の訳語です。したがって、「文化」は農耕や土地と深い関係を持つものであるに違いないというのです。耕作の仕方は山地と平地、湿地帯と乾燥地帯、寒冷地と温暖な地域で異なる。その結果、収穫する作物も当然違う。作物が違えば食べ物や食べ方も違ってくる。だから、土地ごとに食の特色が生まれる。食は、その土地の生き方を表す代表的なものの一つと言える。

その土地の食や酒、あるいは祭り、芸能、言語、歴史、伝統、風俗風習などその土地独特の生き方の形式が「文化」なのであると…。

こう考えると「物質文明」に対して「精神文化」、「都市文明」に対して「農村文化」や「地域文化」といった言い方などもスムーズに入ってきます。「文化」のルーツが農耕にあったとすると、文化には、土地の匂いがし、手足を動かし、収穫を楽しむという喜びがあります。

文化に関する仕事に携わる者として、文化の持つこうした要素を認識し、これらの要素に思いを寄せながら、館を訪れていただく方々の求めるものについて再考する必要性を改めて感じたりした次第です。

土佐文学さんぽ 65

土佐と西南戦争こぼれ話 ― 浜本浩「揚雲雀」 ―

猪野 睦

薩摩の西南戦争の余波は、土佐にどうとどいていたろうか。立志社内でも議論があり、県西部でもゆれた。土佐は自由民権コースをたどることになるが、浜本浩は戦時下、そのこぼれ話のような小説をかいた。

「錦旗掲らば」「烽火」「五月の花」ほか多くが単行本になった。そのなかの「烽火」に「揚雲雀」があった。薩摩の西南戦争の余波が土佐にも伝ってきていた時代である。土佐から江戸へは本山、立川番所、笹ヶ峰越え、馬立、川之江が常道だった。明治になってあらたに戸出野新道ができ、穴内川に沿う大杉も通路になっていた。

ある日その杉の大杉で知られる村の白壁の旧家へ見なれない旅人がきて主人に面会を求める。久留米絣の書生羽織の斬髪の若者である。土佐の立志社も薩摩の西郷軍に呼応するという風評が伝っていた。斬髪の若者は紹介状はもっていないが板垣先生の推挙できたと、肋骨のついた軍服に着換え、九州弁で陸軍中尉磯島と名のり名刺をだす。

西郷先生が蹶起すると決め板垣先生も提携するという。それで自分は軍用金のことできたと新札の軍票をだし、これは新紙幣であり九州では通用している。一年すれば新紙幣の世になる。それで旧貨と両替していただきたい。出資の三倍をお渡しする。財産は三倍になる。出資者には官員登用の特典もあるといういい話に釣られ軍票を買わされる。

西南戦争が始まり、西郷軍敗走、土佐でも林有造、大江卓らが呼応し東京で逮捕されていく。大杉へきていた男は道後で二セ札をつくり持ちこんだ詐欺師だった。

松本清張が「西郷札」をかいたのは昭和26年、「週刊朝日」の懸賞小説入選作だった。このあと「或る『小倉日記』伝」が芥川賞となった。「西郷札」は明治10年西南戦争のとき、薩摩軍が軍費調達の軍票をだし西郷札（ふだ）と呼ばれた。西南戦争が終ると九州一帯で札はホゴになった。この札を政府に買取らせるという風評がたつと持っている者は売らない。近く買い上げになるそうだと相場が上っていく。欲の渦巻く西郷札旋風がリアルだった。

浜本浩は松本清張より10年以上も前に、西郷札をかいた。果して土佐に本物の西郷札は入っていたろうか。

近年は高知自動車道ができ、大杉を通る旧道はさびれたが、大杉の杉と社の下の坂道の両側には、明治期以降の原型がさびれて残っているように見えた。

（詩人）

◀推定樹齢3000年を誇る、特別天然記念物の大杉。

資料受贈報告

―寄贈資料から―

小砂丘忠義（さおかただよし） 書簡 田村豊崇宛

1937（昭和12）年9月20日付
（後略文中「昨夜は芋名月※」より推定）
巻子仕立て 封筒欠
竹内 功氏寄贈

※芋名月…中秋の名月のこと。
1937年は9月19日。（国立天文台調べ）

田村兄　小砂丘拝

いよいよ来た由、出征の門出を祝す。病床からでは心細からうが、家にとっては責任者だ。いふまでもなく自重を祈る。

（中略）

剣をとる友にまけぬ気でペンで死ぬだらう。雑誌もそれまでは止さぬ、（中略）

九月休刊、十月出す。

床の中で字がかけぬがえは代筆させぬ、他は判読されたし、かなりつかれる。

（後略）

右の書簡は生活綴方（つづりかた）の父と言われる小砂丘忠義が高知の青年教師・田村豊崇へ宛てたもので、小砂丘最後の手紙となりました。田村豊崇は、橋詰延寿とともに『土佐読本』を執筆し、「土佐綴方人の会」会員として南方教育大会開催に奔走、小砂丘らを高知に招いた人物です。

この書簡には、召集令状を受け出征する友を案じるとともに、生涯の事業である雑誌「綴方生活」への熱い思いが込められています。

「綴方生活」は、子ども向け綴方学習雑誌「鑑賞文選」の親雑誌として昭和4年10月に創刊。「教育に於ける「生活」の重要性」をスローガンに掲げた、綴方指導の実践書として全国の教師から支持を受けました。読者の誌代未納等から困難な経営を強いられ、休刊を繰り返しますが、小砂丘は最後まで「綴方生活」発行の努力を続けました。

書簡に「九月休刊、十月出す」と書いた小砂丘でしたが、その願いは叶わず、昭和12年10月10日、ついに帰らぬ人となりました。

同年12月、追悼文とともに小砂丘の遺した予定原稿と編集をそのまま掲載した小砂丘忠義追悼号が同人によって発行され、創刊から約8年間で68冊を世に送りだした「綴方生活」は終刊を迎えました。

（学芸課／岡本美和）

受贈報告（平成26年3月～5月）敬称略

▼**松田房徳**・「大町桂月俳句軸」他 ▼**嶋岡 晨**・「詩集 洪水 嶋岡 晨著 洪水企画刊」▼**片岡文也**・「季刊詩集 ゆすりか100号 「悼む 片岡文雄先生」収載 藤森里美編 ゆすりか社刊」▼**田中励儀**・「田中英光事典 越前谷 宏他編 三弥井書店刊」▼**竹崎邦博**・「植木枝盛と女たち 外崎光広著 ドメス出版刊」他

▼**横田晴光**・「道祖土家の猿嫁 坂東眞砂子著 講談社刊」他 ▼**福井まゆみ**・「歌集 弾かない楽器 福井まゆみ著 本阿弥書店刊」▼**山本清水**・「樹 山本清水詩集 山本清水著 清樹社刊」▼**猪野幾久子**・「短篇集 ハーブの夕 猪野幾久子著刊」▼**亀井雉子男**・「句集 青山河 亀井雉子男著 本阿弥書店刊」

▼**ふじなみ句会**・「句集 ふじなみ ふじなみ句会編刊」

▼**高岡弘幸**・「地方都市の暮らしとしあわせ 高知市史民俗編 高知市史編さん委員会民俗部会編 高知市刊」

▼**原田英祐**・「野根山二十三士（野根山事件150年）―東洋町資料集・第4集― 原田英祐著刊」

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

常設展虫めがね

4回シリーズで、変わる常設展示をご紹介！

第一回

高知県立文学館では、いつ来ても新しい発見、新しい体験をしていただけるよう、展示入替を行っています。今年度は「反骨の大衆文学」コーナー・浜本浩、「現代の作家」コーナー・上林暁と安岡章太郎、「近現代の詩歌」コーナー・橋田東声を新たに展示しております。

展示作家紹介① 浜本浩

浜本浩は1890(明治23)年、松山市生まれ。体操教師の父の転勤に伴って、幼少時代を高知市、安芸市で過ごします。16歳で京都の同志社中学部へ転校し、「中学世界」や「文章世界」に投稿し入選するなど、文学を志すようになりました。

19歳の時、同志社を中退し、上京。竹久夢二を訪ね、知遇を得ます。後年、「浅草の作者」として有名になる浜本は、夢二に連れられて十二階下や浅草界隈を歩き、その魅力のとりことなったのでした。

1919(大正8)年、雑誌「改造」の記者となった浜本は、京都大学担当記者として京都に赴任、新村出、朝永三十郎ら、そうそうたる教授・講師陣を担当し、「改造は京都で編集している」と言われるほどになりました。また、アインシュタイン来日の際は、案内役として数日間を身近に接し、「アインシュタインを迎えて」と題した連載の中で質朴で飾らない、ユーモアに満ちた博士の姿を伝えています。

編集者として、志賀直哉や谷崎潤一郎などの文豪から信頼され、愛された浜本でしたが、1931(昭和6)年末には改造社を退社、いよいよ作家としての道を歩んでいくこととなります。

1933(昭和8)年4月号「オール讀物」掲載の「十二階下の少年達」で好評を得、1937(昭和12)年2月より東京日日新聞で連載した「浅草の灯」は直ちに映画化されるなど大好評となり、翌13年に『浅草の灯』が刊行されると第1回新潮社大衆文芸賞を受賞、作家としての地位を確立しました。

「浅草の作者」として親しまれる一方で、『土佐のカルメン』や『海援隊』など、土佐を題材にした作品も多く、また、東京在住の高知出身文人らによる随筆雑誌「南風」の発起人になるなど、故郷土佐への熱い思いを終生持ち続けた作家でもありました。

今回の展示では、「改造記者時代」「浅草オペラと浜本浩」「土佐への熱き思い」の3つのテーマで浜本浩を紹介。初版本や直筆原稿、色紙など貴重な資料とともに、「浅草の灯」のモデル・凌雲閣の模型も展示しています。

(学芸課／岡本美和)

▲浜本浩コーナーの展示風景。左は凌雲閣の模型。

平成26年度 第17回児童生徒文学作品朗読コンクールのお知らせ

高知県立文学館では、「第17回児童生徒文学作品朗読コンクール県審査」を平成26年11月2日(日)午後1時より、文学館1階ホールにて行います。全国的にも珍しい全県区を対象とした小中学生の朗読のコンクールです。今年の特別審査委員にはNHK連続テレビ小説「花子とアン」の原案『アンのゆりかご～村岡花子の生涯～』をお書きになった村岡恵理先生をお迎えし、こどもと読書についてのお話しや、主宰を務めておられる「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」についてお話しいただける予定です。

昨年度は、言語活動から児童・生徒の読解力、表現力を育成し、豊かな心や感性を伸ばすことを目的とした高知県教育委員会「ことばの力育成プロジェクト推進事業」と連携して、新しく高知県教育長賞を設けました。昨年の高知県教育長賞の受賞者は高知県教育委員会主催「ことばの力育成プロジェクト推進フォーラム」(平成26年1月26日)において、朗読を披露しました。学習発表のトップバッターでしたが、朗読コンクールと同じように堂々とした発表でした。

昨年の地区審査では高知県下36校108名が参加し、11月の県審査には16校22名が選ばれました。県審査に選ばれた皆さんの朗読は、審査員の先生が驚かれるほど、練習を重ねたことがうかがえる朗読でした。会話文と地の文の読み分け、呼吸の取り方などの技法的な部分と、小学生、中学生らしい溌剌とした力強い表現力は、指導して下さっている先生方と二人三脚で一生懸命練習してきてくれたのだろうな、と感じました。また、他の人の朗読を聴くのもよい機会になっていると感じます。

一口に朗読と言っても、声に出す前に朗読する作品をしっかり読み込むことが必要です。また、作品全体の中でその場面がどういう部分なのか、ということも重要です。朗読コンクールでは朗読作品を高知県ゆかりの作品を1類、その他の作品を2類と分けており、郷土文学賞は1類の中から選ばれます。高知の方言で書かれた作品を、郷土のことばで自然な朗読ができるのは、高知の子どもの特権ではないでしょうか。今年度も、朗読コンクールの場が子どもたちの自己成長や切磋琢磨の場になれるようにと考えております。

高知県立文学館は、そういった子どもたちの瑞々しい感性やことばの力を育む場として、お役に立っていきたいと考えております。審査会は入場無料となっておりますので、高知の子どもが伸びやかな感性を使って朗読をしている姿を、ぜひ各会場で御覧ください。

(学芸課／谷岡真衣)

◆地区審査(公開)

8月15日(金)午前10時
東部会場(田野町ふれあいセンター多目的会議室)

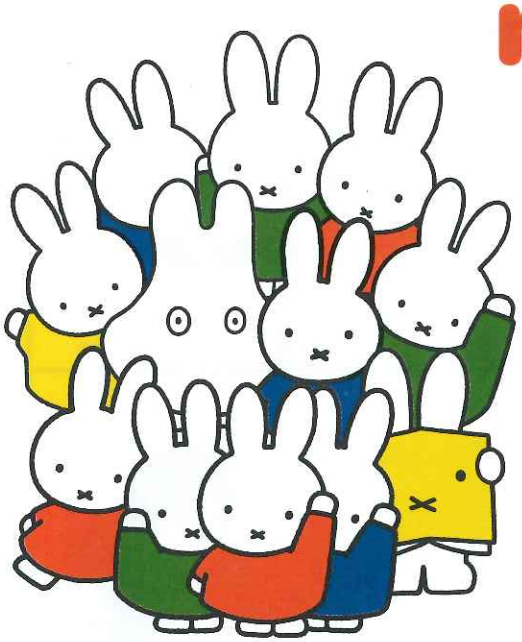
8月18日(月)午前10時30分
西部会場(大方あかつき館レクチャーホール)

8月21日(木)午前9時　高知会場(文学館1階ホール)

◆県審査(公開) 表彰式・記念講演会があります。

会場：高知県立文学館ホール
日時：11月2日(日) 午後1時～

お問い合わせは朗読コンクール担当まで(TEL：088－822－0231)



many many miffy

PREMIUM

メニーメニー ミッフィー プレミアム

～絵本の楽しいことといっぱい～

7月12日(土) ～ 9月7日(日) まで

好評開催中!!

会期中無休
観覧料：500円（常設展含む） 高校生以下無料

ミッフィーの楽しい絵本の世界、高知県立文学館で広がる。

世界中で愛されている小さなうさぎの女の子・ミッフィー。彼女は、1955(昭和29)年にオランダで誕生しました。

絵本作家、グラフィックデザイナーでもあるディック・ブルーナさん(1927～)により生み出されたミッフィーは、オランダでは〝nijntje〟(ナインチェ＝うさちゃんの意味)、日本では〝うさこちゃん〟とも呼ばれ、来年で誕生から60年を迎えます。

余分なものを削ぎ落としたシンプルな絵は、ペンではなく細い筆で、すべてフリーハンドで描かれており、わずかにゆらぐ輪郭線には、その時のブルーナさんの息づかいや、作品を描いているときに注いでいた愛情が込められています。

絵本の登場人物がまっすぐに正面を向いているのは、「読者と正直に、まっすぐに向き合うようにしたい」という思いがあるためで、たくさんの色彩ではなく「ブルーナカラー」と呼ばれる限られた色を使うのは、〝色が読者にあたえる印象〟を大切にしてデザインしているためです。

また、ミッフィーは絵本のなかで、病気になったり、家族を失ったり、時には間違いも経験します。しかし、最後はすべてハッピーエンドで締めくくられています。現実に起こるつらい出来事もあえて絵本に取り入れ、最後を幸せに締めくくる内容にすることで、私たち読者は「もし悲しいことや辛いことに巡りあっても、ミッフィーのようにまっすぐに向かい合えばきっと大丈夫」と温かな気持ちで読み終わることが出来ます。

このように、ブルーナさんは一見シンプルな中に、細部にまで心をこめた絵本づくりをしています。

その温かさ、洗練されたデザイン、リズム感の良い文体は多くの読者を惹きつけ、これまで世界約50ヶ国語に翻訳されました。以来、さまざまな国で、親から子へ、2世代、3世代にわたって読み継がれています。

高知県立文学館では、このような素晴らしい絵本の世界を、分かりやすく、楽しく紹介し、子どもたちが本のぬくもりと出会うきっかけ作りの場となることを使命のひとつと考えています。

また、ミッフィーの最初の絵本が出版された後、どの国よりも早く翻訳出版したのは日本でした。今年は翻訳出版50周年の記念の年にあたります。

この機会に、公益財団法人 東京子ども図書館のご協力のもと〝子どもたちに良い本をたくさん読んでほしい〟と、ブルーナさんの作品を的確な文章に翻訳し、紹介した翻訳者・児童文学者の石井桃子さん(1907～2008)の輝かしい文学活動の足跡もご紹介しています。

会場では、ブルーナさんが描くイラストレーションを時代別に並べ巨大パネルで紹介しているほか、絵本制作のひみつ、写真家によるミッフィーと四季の写真の展示、初めてのミッフィー映画の紹介など、様々な角度でミッフィーの魅力をカラフルに展示しており、連日、子ども達の可愛い歓声で賑わっています。

もちろん、毎年大好評の記念撮影スポットや記念グッズもたくさんご用意しました。ミッフィーの素焼きぬりえなど体験型のワークショップもありますので、この夏は、カメラを片手に、プレミアムなミッフィーの世界にぜひお越しください。

（学芸課／福冨陽子）

▲カラフルな会場で、ミッフィーの魅力を再発見できます。

Illustrations Dick Bruna © copyright Mercis bv,1953-2014 www.miffy.com

高知県立文学館ニュース　第66号　平成26年8月4日発行　〒780-0850　高知市丸ノ内1丁目1番20号　電話088-822-0231　FAX088-871-7857

高知県立文学館　カレンダー 8月～10月

企画展案内

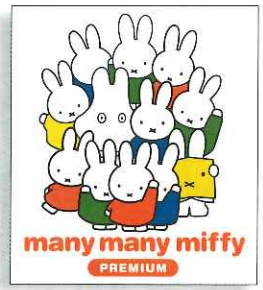
メニーメニーミッフィープレミアム

～絵本の楽しいことといっぱい～

7月12日(土)～9月7日(日)　場所：企画展示室　観覧料：500円

ミッフィーの生みの親で絵本作家、グラフィックデザイナーのディック・ブルーナさんが描くイラストや絵本の制作のひみつ、これまでの歴史などをパネルや立体資料で分かりやすくご紹介します。ミッフィーの可愛い絵本の世界をお楽しみください。

詳細は7ページをご覧ください。



Illustrations Dick Bruna © copyright Mercis bv,1953-2014 www.miffy.com

中脇初枝展　～ちゃあちゃんの里帰り～

9月19日(金)～11月3日(月・祝)　場所：企画展示室　観覧料：500円

中脇初枝さんは、県立中村高等学校在学中、『魚のように』で坊ちゃん文学賞を受賞、17歳で作家デビューしました。『祈祷師の娘』『きみはいい子』など、温かい筆致で描かれた作品世界は多くの人々に愛されています。本展覧会では、純文学、昔話、児童文学と、さまざまなジャンルで展開されている中脇作品世界の魅力をご紹介します。

中脇初枝展のご案内をしています！　詳細は表紙・2・3ページをご覧ください。

撮影／根津千尋

第17回 児童生徒文学作品朗読コンクール

当館では、朗読を通して文学に親しむ子どもたちを育てたいと願い、毎年、朗読コンクールを開催しています。子どもたちが一生懸命練習した朗読を聞きに、ぜひ、会場へお越しください。

◆地区審査(公開)

☆8月15日(金)午前10時
　東部会場(田野町ふれあいセンター多目的会議室)

☆8月18日(月)午前10時30分
　西部会場(大方あかつき館レクチャーホール)

☆8月21日(木)午前9時　高知会場(文学館1階ホール)

高知県芸術祭 文芸賞作品募集！

平成26年度高知県芸術祭では、「第43回文芸賞」の作品を募集します。

【公募作品部門】
- **短編小説**　一人一編400字詰原稿用紙で10枚以内
- **詩**　一人一編400字詰原稿用紙で2枚以内
- **短歌**　一人3首以内
- **俳句**　一人5句以内
- **川柳**　一人5句以内

【選賞】
- 各部門ごとに文芸賞と文芸奨励賞(賞状と副賞)

【締切日】
- 平成26年9月30日(当日消印有効)

【注意事項】
- 作品は未発表のもの
- 応募者は高知県在住者
- 全部門とも自由題
- 文字は楷書で読みやすく表記
- 短歌、俳句、川柳は通常ハガキで応募
- 原稿用紙の場合は、1画に1文字を記入
- 氏名(ペンネームがあれば併記)、現住所、電話番号、年齢、性別を明記
- 応募作品は返却しません
- ご記入いただく個人情報は、運営上の管理及び本人への連絡の用途に限り、利用いたします。ただし、入選作品については、在住市町村名及びお名前・年齢を公表します。

応募問い合わせ先

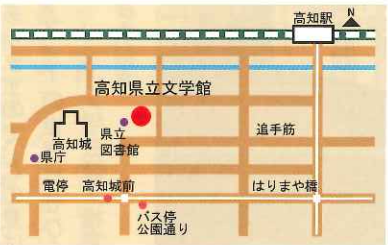
〒781-8123
高知市高須三五三－二
(公財)高知県文化財団内
高知県芸術祭文芸賞係　あて
TEL 088-866-8013

利用案内

開館時間	午前9時～午後5時（入館は、午後4時半まで）
休館日	年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。 ※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
観覧料	一般360円　企画展はそれぞれ異なります。 20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、 高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。
駐車場	なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備	ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室

E-mail:bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス(県庁前行)「公園通り」下車　北へ徒歩5分
- JR高知駅下車徒歩20分(またはバス・路面電車を利用)
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話　088-822-0231
FAX　088-871-7857